



## こどもの病気の基礎知識

## ーマイコプラズマー



マイコプラズマ肺炎をご存じですか？

マイコプラズマ肺炎とは患者さんの咳などにより、肺炎マイコプラズマという病原体に感染しておこる病気です。この病気は、子どもたちのうちでも年長児から学童にかけて見られることが多いですが、幼小児期においても肺炎までいたらない「マイコプラズマ感染症」は稀ではありません。感染してから2～3週間後、頭痛・倦怠感・発熱・咽頭痛・咳などの症状が出現します。この病気に特徴的な症状というものはなく、あえて言うならば鼻水や痰などがほとんど目立たないことが通常の風邪との違いとも言えます。胸部レントゲンで明らかな肺炎の影が認められても、全身状態が良くかなり元気で活動的な場合も少なくありません。「肺炎」と聞くと「ぐったりする」「危険な状態」などのイメージがあるかもしれませんが、マイコプラズマ肺炎は基本的には「元気な肺炎」であることがほとんどであり、3週間ほどで自然治癒します。

マクロライド系の抗生物質が効きにくい耐性菌も増えてきていますが、それによる重症例が増えている傾向はみられていませんので、必要以上に心配することはありません。しかし、時には重症化することもありますので、かかりつけの先生にご相談されるのがよいでしょう。



## なになに？えこちるっこQ&Aコーナー



**なになに？えこちるっこQ&Aコーナーは、エコチル調査にご参加いただいているお母さまや、えこちるっこたちの健康や病気に関するご質問にお答えするコーナーです。今回は小児科外来でよくあるご質問のひとつ、「アトピー性皮膚炎」についてお話ししたいと思います。**

アトピー性皮膚炎は、皮膚に炎症が起こり、強いかゆみを伴う湿しんができて、よくなったり悪くなったりを繰り返す慢性疾患です。

アトピー性皮膚炎がある場合、遺伝的な体質（アトピー素因）によって、皮膚のバリア膜が弱くなっているため、汗やほこりなどの様々な刺激物が入りやすくなっています。そのため炎症が起こり、湿疹ができて強いかゆみが生じるのです。

アトピー性皮膚炎の治療は、「スキンケア」「薬物療法」「悪化因子の除去」が3つの柱です。まず、入浴で皮膚を清潔に保ち、保湿用外用薬を使って皮膚の乾燥を防ぎます。炎症や湿しんがあるところには、ステロイド外用薬などを使用します。また、アトピー性皮膚炎は「ストレス」「気温」「湿度」「体調不良」「発汗」「衣服」「化粧品

品」「食べ物」などさまざまな要因によって悪化することがあるため、取り除くことができる悪化因子はできる限り取り除くことも大切です。

アトピー性皮膚炎が起こる「体質」そのものは、残念ながら完全には変えることはできません。

「完治」を目指すのではなく、「標準治療で症状を抑え、アトピー性皮膚炎のない人と同じように社会生活を送る」ことを目指し、“病気とうまく付き合っていく”という姿勢が大切です。標準的な治療を行っていても、さまざまな要因によって症状が悪くなることがあります。そのような場合にも自己判断で薬の使用を中止したりせず、皮膚科専門医に相談したり、スキンケアの方法を見直すなど症状の改善を図りましょう。



**質問票は6か月ごとにお送りしております。遅くなくても構いません、お手元にまだご回答いただいていない質問票をお持ちでしたら、ぜひご記入の上、ご返送をお願いいたします。また、質問票を紛失・破損された場合でも、お気軽に事務局までご連絡ください。**

**すぐに新しい質問票をお送りいたします。**

**引き続きエコチル調査へのご協力をどうぞよろしくお願いいたします。**



■発行  
九州大学エコチル調査事務局内  
すくえこ編集部

〒812-8582  
福岡市東区馬出3-1-1  
九州大学  
コラボステーションⅡ701

電話・FAX (092)642-6453  
ホームページ：  
<http://eco.kyushu-u.ac.jp/>